

## 『ベーツ日記』に見る第4代院長、カナダ・メソヂスト教会宣教師 C. J. L. ベーツのスピリチュアリティについて

The Spirituality of the Fourth President of Kwansei Gakuin, Cornelius John Lighthall Bates  
Based on His Diary written in Nojiri and at KG, July 1<sup>st</sup> ~ September 28<sup>th</sup>, 1935

Daniel H. Dellming

2001年11月15日に発行された『学院史編纂室便り』No. 14の中で、小林信雄名誉教授は池田裕子氏による『ベーツ日記』の解説と公開について次のように述べている。「誇張ではなく、関西学院の歴史研究に新しい地平を開く新資料であると直感した。(中略) 学院史の中心は<精神史>であり、それがキリスト教主義学校たるゆえんである。それは単なるスローガンや教養および儀礼の形式ではなくて、人格の精神的思想的な内容によって基礎づけられねばならない。それが第二世紀の学院史研究のもっとも重要な課題であると私は確信している。その要求にまず応えたのがこの『ベーツ日記』である」。

学院史編纂室共同研究「院長研究ーランバース、ニュートン、ベーツー」プロジェクトは2002年度に発足した。私は、2004年度よりベーツ先生直筆の『ベーツ日記』のワープロ原稿の校正作業に取り組み始めたが、『ベーツ日記』の一ページ、いや一文ごとに心が動かされ、校正作業もそっこのけに、『ベーツ日記』にのめりこんでしまっている。

日記には、学院のロゴマークのようにになっている、ベーツ手書きの”Mastery for Service”と当然のことながら同じ字体で、ベーツ自身が読んだ様々な聖書の箇所と瞑想や解釈が記録されている。ベーツの心の葛藤や神への祈りも多い。また、家族や学院関係者の名前を書き込み、彼らのために祈り、印象に残った言葉や出来事を書き記している。2010年10月の『K. G. TODAY』vol. 260の裏表紙に載っているベーツ院長の写真(左)は1937年のもので、今、私が読んでいる1935年の日記の2年後に撮影されている。この写真を見て、日記を書いているベーツの姿を想像しながら作業を進めている。



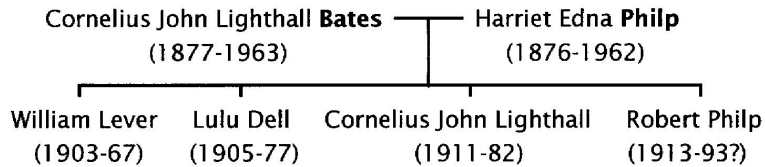
日記にはベーツの信仰生活、そして、彼のスピリチュアリティそのものが表されており、日記が彼にとってオアシスであったことがわかる。子どもが母親の胸に抱かれているかのように、神の大きな愛と慰めに自分の思いや心配を、そのまま委ねているベーツの姿がある。自身の病氣と闘いながら、そして夫人の病と看病の真ただ中で、ベーツは日記を書いた。日記は彼にとって日々原点に戻り、神の御心を求め、導きを感じた時は、それに合わせて自分の生き方を修正する場所でもあった。

例えば、1935年7月25日(野尻湖にて)には、夫婦共に病気であったため、学院のために十分仕事ができないという思いから、退職するべきかどうかで悩んでいる記述があるが、その日の最後の書き込みは”I pray that God may give clear guidance.”である。ベーツが神を信頼し、神の導きに身を任せていることがよくわかる。

また、1935年9月12日にはペトロの手紙一5章7節(新約聖書)を引用している。”Casting all your care upon Him for He careth for you.”(思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけてくださるからである)。その言葉に続き、ベーツ自身の心の奥底にある思いを書いている。”What cares have I?”という問いの後に挙げたリストを見ると、まず夫人と子ども達、そして学院のことを常に心に留めて祈っていたことがわかる。

- My dear Hattie's health and happiness (ハティはベーツ夫人の愛称)
- Lulu's peace of mind ... (娘が両親の事を心配し過ぎているので、落ち着けるように)
- Lever's salvation (長男の救い)
- My own health - for Hattie's sake (夫人の看病のために、自分が健康になれるように)。

【家系図】

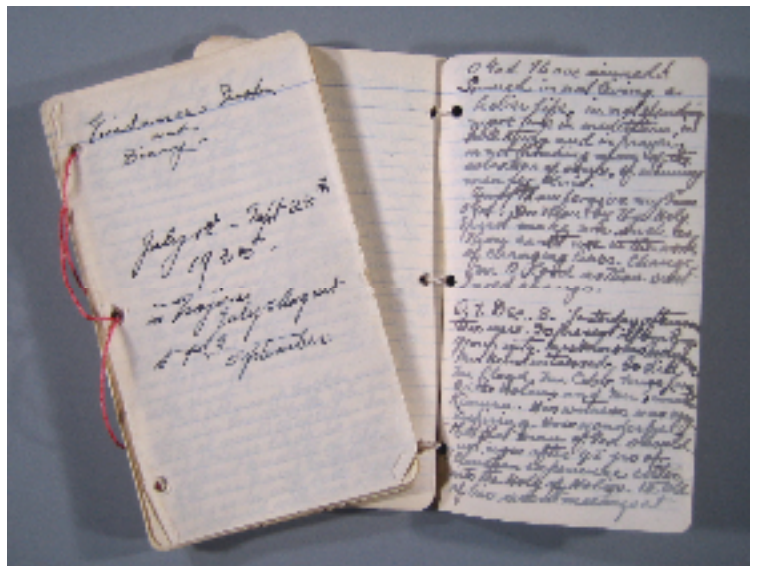


家族の後に”The religious life and work of Kwansei Gakuin.”で上記のリストは終わるが、学院の働きだけではなく、”the religious life”と、学院のキリスト教主義学校としての在り方についても、並々ならぬ思いがあったことが推測される。ベーツ自身についても、福音を他の人に伝える上で、自分の気の弱さと控え目なところを悔いている。”Why have I not led more people to Christ?”そして、自身の短所を幾つかリストアップされたりもしている(7月31日)。

関西学院は今日、幼稚園から大学までを擁する学院へと成長を遂げた。その発展、そして変化の中で、私達が守っていかねばならないことは何であろうか。ベーツは、学院の成長は神様のおかげであり、”God will take care of K.G. if KG people submit themselves to Him.”(神はKGの人が神に従順であれば、学院を守ってくださる)と書いた(7月29日)。

ベーツの言葉の重み、彼の強い思いを噛みしめながら、これからも、解読作業に取り組んでいきたい。

\* 本稿作成に協力してくれた妻康子に感謝します。



ベーツは75年前の12月の日記に「神様、私は罪を犯しました！」と告白している。ベーツの言う罪とは、自分の生き方が人々をイエスキリストに導くのに十分でなかったことである。

(高等部宣教師)



『ベーツ日記』とは



ベーツ第4代院長の三男ロバートの孫に当たるスコット・ベーツ(Scott Bates)さんのトロントのご自宅を1999年に訪問した際、見覚えのある筆跡で“Guidance Book and Diary”と記された紙の束が保管されていることに気がきました。中を確認すると、約1,700枚の小さな紙片(164ミリ×96ミリ)に太いペン先で細かな文字がぎっしり書かれた1935年から42年までのベーツ先生の日記でした。スコットさんのご好意に甘え、長らくお借りしていましたが、2009年6月に来日された際、この貴重な遺品をご寄贈くださいました。

現在アトランタにお住まいのスコットさんは、弁護士として活躍されています。

(学院史編纂室 池田裕子)